

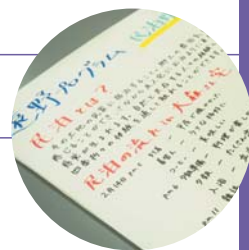
# 身近な課題に取り組み生きる力を育む 地域課題解決型キャリア教育

いま注目を集める、地域と高校の連携。この連載では、地域課題に取り組み、高校生はどう育つのか、また、学校はどのように地域と連携できるのかを探っていきます。

取材：文／江森真矢子

## 信頼できる大人たちとの 多様な協働を通じて 志望理由を確実なものに

### 第4回 遠野高校(岩手・県立)



「遠野の町は南北の川の落合にあり。以前は七十里とて、七つの溪谷おのの七十里の奥より売買貨物を聚め、その市の日は馬千匹、人千人の賑わ

しきなりき」。柳田國男が『遠野物語』で描いた遠野市街の中心は、その市の立つた一日市通りだ。そこから徒歩で10分ほど西の山側に下ると、100年を超す歴史を誇る岩手県立遠野高校がある。サッカーの名門校として県内各所から生徒が集まり、国立大学への進学者と就職者の数ほぼ同数。市内に上級学校がないので卒業をすると遠野市を出る生徒が大多数という学校だ。

#### 豊富に用意された 地域と関わる機会

一日市通りに戻ると、かつて呉服商として栄えた三田屋の建物がある。数年間、空き家となっていた店舗に、東京から来た大学生や研究者、地域住民が集まり屋内調査を始めたのは2012年。総勢50人の中には、遠野高校の生徒・教員約20人がいた。その後、続く昔の町並みについての聞き取り調査や、加工食品を作る商店への調査、建物の再生作業にも常に遠野高校生の姿があった。このプロジェクトは遠野市が地域

の豊かな未来をつくるための新しい手法として、建築家などに委託して実施している「遠野オフキャンパス」の一部として行われている(左ページ写真)。「遠野の未来をつくるには、未来を担う高校生に参加してもらいたい」という企画者や市の思いがあり、助川先生に相談に行ったところ、快く賛同してくださいました」というのは、遠野市の菊池陽一朗さん。

遠野高校には、こういったNPOや大学研究室の主催プロジェクトへの参加、地域でのボランティア活動の機会が多くあるのだ(図1)。それだけでなく、校内に地域の職業人を招く「ミニ講座」など大人と共に活動したり話をする場が設けられている。

#### はじめは志望理由 進路意識を深めるために

年間でいずれかの活動に参加する生徒は全校で約半数。参加は生徒からの希望によるが選抜も行っている。校内で行うミニ講座は講演後に講師と膝を突き合わせて話す第二部を必ず設けるが、講演参加生徒からさら

図2 キャリア教育としての地域連携  
(社会貢献できる人材となるために)

<b>A 生徒指導的視点</b>	
①社会マナーとルール、整容等への意識づけ	異世代、異分野の大人とのコミュニケーションに対応するために必要な資質
②事務的な段取りへの理解	報告・連絡・相談の大切さ、ていねいな書類作成、適切な対応等への意識づけ
<b>B 教務的視点</b>	
①基礎学力定着の大切さ	活動を深めるための、社会的な教養や高校生としての知識の必要性
②思考力、表現力の大切さ	アクティブラーニング授業における資質向上
<b>C 進路指導的視点</b>	
①進路希望の明確化	具体的な体験に基づく進路意識の育成
②主体的な活動への導き	自己課題解決に向けて主体的な活動参加

図1 3年間の取り組み

(■校内での進路行事 ■校外での進路行事 ■地域連携 ■市外での連携)

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
1年	入学式		高校総体 1期審査 体育祭		夏季休業	文化祭 2期審査 就職選考		修学旅行 3期審査	冬期休業	センター 試験	4期審査	卒業式
2年			職業適性研究	東北大見学	東京大学イノベーション サマープログラム	遠野オフキャンパス	岩手大県立大見学	企業見学	文理選択 ウインターセッション	遠野冬プログラム	志望理由書作成	
3年			ふれあい看護体験	遠野オフキャンパス ミニ講座	ハイスクール 世界サミット	年間を通して以下のような活動に任意で参加 ①福祉施設等でのボランティア ②まつりなどでのボランティア ③除雪、河川清掃ボランティア ④地域の郷土芸能保存会での活動						



写真左から  
助川剛栄先生(進路指導主事)、飛内雅之さん(遠野市経営企画部 まちづくり再生担当部長)、菊池陽一朗さん(遠野市経営企画部 まちづくり再生担当主事)

### 三田屋プロジェクト



遠野オフキャンパスでは、三田屋プロジェクトのほか、馬とくらしオフキャンパスなどの活動が行われている。これ以外にも地域での活動は多くあり、参加した生徒はそれぞれの表現手法で活動から学んだこと、考えたことをポスターにし、校内に掲示した。限られた人数の生徒の体験を、どう全校に波及させていくかは課題の一つ。

### 三田屋プロジェクト



### 馬とくらしオフキャンパス



### 生徒のまとめ作品



まつだ松林堂  
松田希実さん

三田屋と同じ一日市商店街で遠野銘菓「明がらす」を商う松田さんは、遠野高校生の活動を見て「光が見えた」という。

「個人商店で物を買うという習慣のなくなった高校生たちは、商店に一步も足を踏み入れずに卒業してしまうこともあります。昔の様子を取材することをきっかけに、商店のことや歴史を知ってもらうことは大きな価値があると思っています。三田屋プロジェクトを通して、子どもたちに参加してもらって商店街を活性化する道もあるのだということも教えてもらいました。三田屋も使える場所として綺麗になり、町の人たちもとても喜んでます」

に10人弱を選抜するという。選抜の基準は進路希望だ。「学びを主体的に発動させるには希望制が良いんです。自ら手を挙げて参加する生徒もいますが、鍵は担任力。生徒の進路希望を把握して、生徒に合う活動があれば一本釣りで声を掛けてもらっています。先生方の参加も任意。頼まれ仕事はおもしろくないですから」と進路指導主事の助川剛栄先生。

助川先生は前任校時代、志望理由書指導の一貫として、生徒に志望分野で働く人の話を聞きに行かせる取り組みを行い、その効果を実感していた。遠野高校で1学年主任になった際、学年行事としてミニ講座をスタートし、翌年には遠野オフキャンパスへ

の参加も開始。取り組みは次の学年にも引き継がれ、3年目には全校での取り組みとなった。「1年目に市役所に講演のお願いに行ったら、2年目には市役所の方からお誘いがかるようになりました。世の中に、高校生と活動したい、高校生に語りたい、という大人はけっこういるんですね。ウイナーウインならぬハッピーハッピーという関係です。ミニ講座だけは今も学校の主催ですが、ほかはほとんど手間がかかっていません」(助川先生)。

3学年主任時代に創立以来最高の国公立大学合格者を出したのは、もちろん地域連携の取り組みだけが要因ではない。しかし生徒は「小論文指導をしなくても書けるようになって

ていました。書く内容をしっかり持っていれば書ける。体験を重ねることによってたくさん抽斗をつくらう。体験を書いて残そう、ということをしてきた結果だと思っています」(助川先生)。また、独自の視点を備えた、社会の実状をリアルに捉えた志望理由書も多くの生まれたそうである。

### 地域に出すことが キャリア教育になる

進路指導のためにスタートした地域連携の取り組みだが、実は生徒指導や教務指導の観点からも生徒を成長させることができることに気づいたという助川先生(図2)。地域に出すためにはしっかりと生活態度が必要。そして大人との対話から、学ぶ

意味を教えられることもある。「結果的にキャリア教育になっていった。真面目だけれど、表現力や発信力が弱いのがうちの生徒。でも、卒業して外に出たらきちんと話ができなければいけません。大学生のプレゼンに触れることや、大人との対話を通して思考力も発信力も鍛えられていると感じます。そして、地元を知りその魅力を発見することは、そこで育つ生徒の自己肯定醸成にも繋がると思うのです」(助川先生)。

そして卒業した生徒には、遠野に残るにしても、出るにしても、自信を持って遠野の魅力を語ってほしいと遠野市の飛内雅之部長は言う。地域と学校のハッピーハッピーな関係はこれからも続きそうだ。

### School Data

1905年創立／普通科／生徒数434人(男子234人・女子200人)／進路状況(2014年度)大学・短大83人、専門学校40人、就職33人、その他1人